

国語

(解答番号 ① ～ ③⑩)

一 次の文章は、北野圭介『情報哲学入門』の一節である。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えなさい。解答番号は ① ～ ⑩。

二〇世紀後半、芸術論や文化研究では(構造主義的な)記号論が取り入れられ、作品やコンテンツが別のなにかを代理として写しだす表象として捉えられはじめて、それが放つメッセージ内容の水準だけでなく、そのメッセージを成り立たしめている記号の配置(コード)の水準も合わせて論じる必要がある、とする解釈方法を普及させた。文化研究は、そうすることでメッセージ内容の手前の段階にある伝達構造の政治性をあぶり出したし、芸術論は自らの存立形式を問いただす自己言及的仕組みにある種の超越論的志向性を見出^{みいだ}そうとした、といった具合に、それぞれの領分でそれぞれの探究メソッドのアップデートを図った——むろん、こうした整理をはるかに越える質をもつた皆さんの作品解釈も生み出されたが、ここでのポイントはそもそもそうした解釈合戦が終焉^{しゅうえん}を迎えつつあるということなので、個別の解釈の可能性を追求することはしない。しかしながら、二一世紀のこんにちにあつては、さらなるアップデートが図られつつあるということは押さえておきたい。

表象は、その発出に照準を合わせた行為の側面で捉えることによってはじめて、その適切な意味合いが把握されるのではないか、という仕方でのアップデートは進行しつつある。行為という側面が、個々の人間の水準で内面化されながら作動するようになっていくといってもいいだろう。

これは、インターネットの情報のサーキュレーション^{*}をみやれば、たやすく察知できるかもしれない。オンライン上でたやすく作品やコンテンツにアクセスできるインターフェイスが整備されると、ユーザーがはまり込んでしまうのは、ひたすら解釈に浸るキョウラク^Aにほかならない。それはそれで楽しいことではあろう。けれども、多くのユーザーは、まさしくその名称のとおり、ただただ鑑賞し、解釈を楽しむ受動的な存在から、オンライン上の情報の挙動の流れに自ら乗り出す存在へと移行した。通りのよい言いっぷりをうければ、ユーザーは自らが書き込み、発信する、ということだ。いわば作品やコンテンツが生成し、変化する磁場に自ら関与しはじめたのである。^{*}UGC (User-Generated-Content) というスローガンまで広く膾炙^{かいしゃ}している。

発信者として皆が乗り出す以上、そうした状況にあつては、力動的な世界のうちで己の自己表象がそれを作成し発信したという行為性もまた情報としてサーキュレート^Bすることになる。表象は、構造によって確定される存在ではない。力の波のなかでヒョウリユウ^Bするのだ。

発信された自己表象をチェックするのは、もはや自らのうちの精神的な核のようなもの(精

神分析用語でいえば「超自我」ではない。そうではなく、オンライン上のレビューの波が巡回し、自己の表象を「いいね！」していくクリック数である。

さらには、だ。そうした発信の競合は、オンラインとの関わりの仕方をさらに次のフェーズに押し上げたようである。インターネットの世界では、何を発したかよりも、誰が発したかにこそ注目が集まる、といわれるのも、こうした状況に関係している。すなわち、いわゆる発信力のある者がメッセージを発した場合、そのメッセージが額面上伝える内容やあるいは、その形式ですらなく、発したという事実それ自体が大きな（もしかすると、より大きな）意味の力をもつ、という事態を生ぜしめたのである。影響力のある発信者の場合、特定の話題について発信しないこと、沈黙していること自体もまた、一種のメタメッセージを放っているとうけとめられかねないフェーズになったわけだ。発信力のない者が過剰な反応行為（いうところの「炎上」）を起こしても自らの発信力を高めようとする場合が出てくるのも、当然といえば当然である。それは発信者個人の資質のせいではないのかもしれない。情報技術が網として張りめぐらされたコミュニケーション空間では構造的に生じてしまうことかもしれないのだ。

こうしたことは、少しややこしい言い回しになるが、自らが自らのありようを理解する仕方にも大きな変容を引き起こしつつある。

二〇世紀後半、人文系の学術界では、メディア文化がもたらすひとびとのアイデンティティ形成という問題が盛んにとりあげられた。主にマスメディアを扱う社会学においてである。急いで付け加えておくと、「メディア」という語を^Cカンする研究は、往々にして二〇世紀のマスメディア研究を^Dトウシユウしたもの^Dが少なくないが、ここではそういった方向に入り込まないように、アイデンティティ形成にとってのマスメディアとメディア技術の関係を段階的に整理しながら考えていきたい。

まず、ひとびとの意識のなかに集団的なアイデンティティを醸成する上で、出版メディア、とりわけ新聞や小説が大きな役割を担ったという、^Eベネディクト・アンダーソン（一九三六―二〇一五年）のナシヨナリズム論が、その第一弾である。いわゆるナシヨナリズムの成立に関する従来の議論であれば、主に一八―一九世紀において、^F傭兵部隊ではもはやもたず、国民皆兵の段階になってそれは勃興した、という歴史的説明が一般的だったが、アンダーソンはそこに一石を投じた格好である――日本ではそうした学説が逆転して輸入され、二一世紀になって逆に、軍事上の傭兵体制の終焉が国民皆兵意識をもたらしたというのが目新しい考えであるかのように主張する者もいたりするが。

メディア経験を共有することで、一定の地理的な^G拡がりの中で生活を営むひとびとの間に共有された集団的心性が醸成されるのではないか、といった論は、欧米を中心に（日本の外側で

は)二〇世紀末にかけて、理論面でアルジュン・アパデュライ(一九四九年生)によってアップデートされる。すなわち、国境をやすやすと跨またいでその流通を拡げるデジタル・メディアの拡大、さらにはそのオンライン上での組み込みが、国の圏域を越えた集団的な感性や自意識を生み出しはじめた、とアパデュライは論じたのだ。デジタル技術がひとびとの自己意識に効力を発揮しはじめた、ということである。メディア経験が国民国家の圏域を軽々と越えて拡がることになったいま、共有される集団的心性もまた大きく広がっていくことになったのである。

だが、もしかすると二一世紀のこんにち、事態はいつそう複雑化しているのかもしれない。

というのも、先にみたような自己表象がショウレイEされ、その発信が促されるこんにち、そうした制作や発信の作業の際にかき集められる素材は、もはや国境などなんの障害にもならないほどインターネット上の流通のなかにあり、いともたやすくアクセスできるものになっているからである。自己をめぐる表象の作成作業は、そうしたかき集めにおいてなされるものとなった。このわたしは、インド映画に耽溺たんできし、南米の音楽にハマリ、イタリアのグルメ情報に通暁する、そんなアジア人である——といった具合だ。じつさい、グローバルなストリーミング配信は、『ゲーム・オブ・スローンズ』のように、世界一斉配信というイベント性を自らのセールスポイントとして売り出したし、音楽サービスでは八〇年代日本のシティポップを誕生から四〇年の月日を越えてグローバルヒットチャートにのせた。少しうがった言い方をすれば、人種的にも民族性においても、ジェンダー的にも性においても、まさに色とりどりのといっている多様性が、オンラインで流れるイメージとテキストの表象空間を埋め尽くしている。

ウェブ上にあつて、アイデンティティをかたちづくる文化表象は、まるでスーパーマーケットのように陳列(display)されている、とある社会学者は論じている。自身の生を取り巻いていた文化表象の数々は、まさにグローバルな拡がりの中で、いまここで生を営むわたしのもとに、あれやこれやと飛び込んでくる。それは、それまで自分を「〇〇人らしさ」、「男(女)らしさ」といったイメージとテキストで条件づけしていたこのわたしのアイデンティティの制約の数々を、あれやこれやの豊かさをもって奔放に解き放つのである。このわたし自身のわたし性をこしらえているのは、色とりどりの文化混淆こんこう的なわたしである、といってもおかしくないほどに。

自己表象の時代となって、文化的アイデンティティが手軽に獲得できるものになったという事態は、それはそれで開放的で、多幸感すら生む。が、他方でしかし、それらが組み合わさるとき、自己イメージの絶え間のない更新が常態化する、という新たな桎梏しこくの中に放り込まれる世界内存在ともなるだろう。ひとは自らの実存のロールモデルをあちこちに、次々と求め、己のありようを絶え間なくアップデートしていく、あるいはしていかざるをえない、というループにはまり込んでいく。サブカルチャーで「沼」という言葉が用いられるようになったが、ま

さに当を得た表現だ。いわば自己形成の作業に絶え間なく自己表象の努力が織り込まれ、自己理解を作動させれば、じつに多様なわたしが出現する、その動態的な変動において、わたしたちは己の生を営んでいる。二〇世紀的なわたし、性が懐かしいほどに、こんにちのわたしの群れは忙しく自らを変動させているのである。

だが、こうした仕方で情報技術と人間のセッティングに関わる問題を括り出すのは、いわば社会学的な考察の水準のものである。

素材が周囲に数多あるなかで自己の表象化を自らおこない、また他者に向けて発信するさまは、いや、刻々と変わる素材の旋回のなかで自己表象を推移させ、また他者との関係を絶え間なく仕切り直しているさまは、どこかに社会なるものがあつてそれを計測し理解しようとする構えとは、大きく異なっているようにみえる。

つまるところ、現実的な存在としてのこのわたしないしひととは、どこでもない場所から社会を眺めているわけではないことが、いやがおうでも随時自覚させられる毎日となったのだ。一九世紀、そして二〇世紀であれば、情報をめぐる制作のブロック、流通にかかわるブロック、そして受容をめぐるブロックは、それぞれ別々に存在し、それぞれの担い手は別々に労働に携わっていた。新聞や放送を思い浮かべればよい。かつては情報を調査する記者や調査員、それらを記事や番組に組み立てる編集者やディレクター、それを読者や視聴者に配送したり配信したりする運搬者や技術者が、別々の業種に分かれて分業していた。それがいまや、すべてひとりで同時に担うことすらできるほど、情報技術は劇的に進化している。YouTubeひとつで試してみてもわかることだ。端的に言えば、ひとはいま、制作や発信の行為者であるのを拒絶することはむずかしい。どこでもないポジションから社会なるものに向けてテレビ画面でコメントを語る識者の言葉が「上から目線」のご託宣に聞こえてしまうのは、すでにあらゆるひとがフラットな表現行為者として存在しているという状態がデファクトスタンダードになったからだ。そこでのコミュニケーション作法が「上から目線」をうがいものに押し上げてしまっているからかもしれない。

ひとは常に行為する主体として在る、そういう存在者へと移行しつつある。端的に言えば、認識に軸足を置く主体から、行為に軸足を置く主体へと――それぞれ個別の人間の間でどのように自覚されているのかはともかく――広く社会で共有される人間像が変容してきているのである。

(本文中に一部省略・改変したところがある)

(注) *サーキュレーション――「循環・流通・普及度」などの意を表す。

*UGC (User-Generated-Content)――ユーザーが自主的に作成したコンテンツ。

問1 二重傍線部A～Eに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それ

ぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は ① ～ ⑤。

A キョウラク ①

① 山と川から敵のキョウゲキを受ける。

② 自然の恩恵をキョウジュする。

③ 景勝地として有名なキョウコク。

④ キョウジュンの意を表す。

⑤ 恐怖のあまりゼツキョウする。

B ヒョウリユウ ②

① ヒョウギンに選任される。

② 選挙のカイヒョウ速報を見る。

③ 桜の開花日を決めるヒョウジュン木。

④ ボトルメールがヒョウチャクする。

⑤ サイヒョウ船が出航する。

C カンする ③

① カンレン企業に出向する。

② 勝利のエイカンを手にする。

③ 事件の真相をカンパする。

④ 山頂からのソウカンに息をのむ。

⑤ 石柱がトウカンカクで並んでいる。

D トウシュウ ④

① 人跡ミトウの土地。

② 目指していた標高にトウタツする。

③ 対応を至急セントウする。

④ 迫力のある演奏にアットウされる。

⑤ 地価がキュウトウしている地域。

E ショウレイ ⑤

① 植民地は本国にレイゾクしている。

② うがい・手洗いをレイコウする。

③ ふるさと納税のヘンレイ品が届く。

④ 授業開始のヨレイが鳴る。

⑤ あまりにもビレイな光景。

問2 傍線部ア「次のフェーズに押し上げた」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑥。

① 作品やコンテンツが別のなにかを代理として写しだす表象として捉えられる段階から、表象における個々の人間の水準が問題になるという段階に移ったということ。

② ユーザーが自主的に作品やコンテンツを鑑賞し、解釈を楽しむという段階から、ユーザー自ら作品やコンテンツを作成し、発信するという段階に移ったということ。

③ ユーザーによる発信が増えて、自己表象したという行為性自体も情報としてオンライン上のサーキュレーションに投げ込まれるという段階に移ったということ。

④ 発信力のある者の発信自体が大きな意味をもち、沈黙していることでさえも一種のメッセージを放っているとうけとめられかねない段階に移ったということ。

⑤ 影響力のある発信者に注目が集まるという段階から、発信力のある者のメッセージに、発信力のない者が過剰な反応行為をするという段階に移ったということ。

問3 傍線部イ「ベネディクト・アンダーソン（一九三六―二〇一五年）のナショナリズム論」とあるが、どういうものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑦。

① 前近代において、階級・職業・言語・地理的要因などにより分断されていた国民が、近代化によって国家への共属意識を持つようになったというもの。

② 国民国家への転換に伴い、戦争の主体だった傭兵部隊が姿を消し、徴兵制度による国民皆兵の段階になったことで、ナショナリズムが勃興したというもの。

③ 一定の地理的な拡がりの中で新聞や小説などのメディア経験を共有することで、その地域で生活するひとびとの間で集団的心性が共有されるというもの。

④ ひとびとの意識のなかに集団的なアイデンティティを形成させるうえで、マスメディアによる大衆扇動機能が、大きな役割を担ったというもの。

⑤ 新聞を中心とする出版メディアの経験が国民国家の圏域を越えて拡がり、共有される集団的心性も大きく拡がっていくことになったというもの。

問4 傍線部ウ「ウェブ上にあつて、アイデンティティをかたちづくる文化表象は、まるでスーパーマーケットのように陳列（display）されている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 8。

① インターネット上にあふれている多様な文化表象を、それぞれかき集めて「わたし」を作り出すことができるようになっていくということ。

② デジタル・メディアが国境をやすやすと越えて、国の圏域を越えた集団的な感性や自意識を生み出しはじめていくということ。

③ オンラインで流れるイメージとテキストの表象空間は、人種的にも民族性においても、多様なものになっているということ。

④ グローバルな拡がりの中で、数々の文化表象がたやすく手に入るようになり、自己イメージの更新が常態化しているということ。

⑤ デジタル・メディアが、アイデンティティの制約となっていたあらゆるしがらみを解き放ち、多幸感すら生むようになっていくということ。

問5 傍線部エ「認識に軸足を置く主体から、行為に軸足を置く主体へ」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 次の①～⑤について、「認識に軸足を置く」時代に関するものには①を、「行為に軸足を置く」時代に関するものには②を、どちらにもあてはまらないものには③を、それぞれ選びなさい。ただし、①～③は、①～⑤の中でどれも二つずつ選ぶこと。解答番号は 9 ～ 14。

① 自己の表象化を行い、他者に向けて発信すること。

② 実存のロールモデルに似せて自らを変動させていくこと。

③ テキストの解釈やコンテンツの鑑賞を楽しむこと。

④ 社会の中で共有される人間像を考えて追求すること。

⑤ マスメディアの情報を受容して集団的なアイデンティティを形成すること。

⑥ 自己の表象を变移させ、他者との関係を絶え間なく仕切り直すこと。

9 10 11 12 13 14

- (2) 次の【資料】は本文と同じ出典からの引用で、本文の最終段落について説明を加えている部分である。空欄 [] に当てはまる語句として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は [15]。

【資料】

認識に軸足を置く主体であれば、正しく認識することが求められるところが、行為をすれば、[] を排除することはできなくなる。その度合いが高まれば、（かつて宗教の時代においてそうだったような絶対的な正義はもちろんのこと）近代に課せられていた相対的に安定的な正義概念を頼りに思考することもできなくなる事態を生むだろう。

フランス現代思想風にいえば、ミシェル・フーコー（一九二六―八四年）が形どつた一九世紀の人間のありよう、すなわち「規律訓練」型のありようが失効しつつある、ということだ。それは「経験論的―超越論的二重体」とも呼ばれた。暴力的な単純化であることを承知でいえば、そのようなフーコーが描き出した、自らの経験様態を規律訓練していくという理念モデルが失効しつつある、ということである。そうした規律訓練は、サーキュレーションの内と外でひたすら空回り状況を生むだけになりつつある。じっさいフーコー自身も、晩年には「規律訓練」型社会から「生政治」の社会への移行を論じはじめていた。

フランス哲学に立ち入る余裕は筆者の力量にはないが、行為の時代がメタレヴェルからのチェックメカニズムの枠組みを溶け出させつつあり、それがために正義論がさまよい、「あれは正しい」、「これは正しい」といった倫理の在り処^{あか}に人々がやっきになる時代に突入したのかもしれない。

（一部省略・改変したところがある）

（注） *ミシェル・フーコー——フランスの哲学者。

- ① アイデンティティを阻害する要因
- ② 多様な自己へと変容する機会
- ③ 絶え間ないアップデートを要求する意思
- ④ どこかの相対する存在者と抵触するリスク
- ⑤ 自らの理念を侵害する権力の存在

次の文章は、高瀬隼子『うるさいこの音の全部』の一節である。これを読んで、後の問い(問1〜7)に答えなさい。解答番号は ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ 。

長井朝陽はゲームセンター「PAL」で働きながら、「早見有日」のペンネームで小説を書いてきた。文芸誌に投稿した小説が芥川賞を受賞し、顔写真と共にテレビで紹介されたことで職場の知ることとなり、周囲の朝陽への接し方が急激に変化した。本文は、会社の本部の広報部長に呼び出された場面である。

広報部長と会うのは初めてだった。四十代半ばの男性で、ダークグレーの細身のスーツにパッチワーク柄のネクタイを着けている。すっきりした顔立ちで、海外の空港のような匂いのする人だった。PALの現場にはいいタイプだ、と朝陽はやや圧倒されながら対峙している。落ち着こうと、目の前のコーヒーマシンに手を伸ばして口を付けた。その味すらマッシロストアの休憩室で飲むものとは違うように感じる。初めて出版社に呼ばれて行った時に、瓜原さんが喫茶室に電話して出してくれたコーヒーと同じ味がした。

「小説家の人たちってやっぱり独特の目線で周りを見ているわけでしょ。社会や人間を書くわけだから。いや、ぼくらもね、今どんなふうに見られているのかなって気になっちゃって。ねえ」と、隣に座るマネージャーと目を合わせると、マネージャーもまた苦笑して「そう考えると、緊張しますね」と返す。どんなふうに見られているのか考えて緊張しているのはこちらの方だ、と朝陽は軽い頭痛を覚える。

初めて広報課への出勤を命じられたものの、こうして広報部長やマネージャーとコーヒーを飲んで話しているだけで、勤務時間が過ぎていく。今日は平日だけど、近くの高校の定期試験の最終日だから、午後から遊びに来る学生が増えるだろう。高校生は仲間うちで盛りあがって遊んで帰るのでスタッフに問い合わせをすることも少なく、人手が足りないということはないだろうけれど、順番を守らないといった客同士のいざこざや、若い人たちがうるさいといった大人からのクレーム対応は絶対に発生するので、こんなところで油を売るくらいだったら、フロアに出て仕事があった。

「仕事中もやっぱり、小説書きたいなと思って思うの？」

続けてそう尋ねられ、広報課出向というのは建前で、人事面談かなにかなのだろうかと思いはじめてしまう。

「仕事中は小説のことは全然考えないですね。頭の、全然別のところでそれぞれ独立している感覚があって、仕事中はある意味小説のことを忘れていますし、家に帰って、小説を書く時はPALのことは思い出さないです」

「へえ、二重人格みたいだね」

「うーん、ある意味、そうなんですかね。ほんとうは、仕事でもなにをしていても、寝ても覚めても小説のことを考えていますって言えたら格好いいんですけど」

照れているように見えますように、と念じながら俯うつむき加減で控えめに笑って、広報部長の目を見つめると、つられたように同じ系統の笑みを浮かべた広報部長が「まあでも、そういうものだよな」と知ったような口をきく。

小説と仕事をそんなにはっきり分けられるわけがなくて、仕事をしながら頭の中で小説の続きを考えることなんてしょっちゅうあるし、小説を書いている時にそういえば明日はあのゲームのイベントがあるからあれを準備しておかなきゃと考えることもある。頭の中で二つのことはいつも行き来していて、でもそれを言わない方がいいんだろうということは分かっていた。

「この間、ナガイさんが入社した時の書類を見たんだけど、ナガイさんはアルバイトからの推薦採用だったんだね。大学二年生からずっとでしょ。今年……あ、六年目？　そう。じゃあ合計で丸八年働いてるんだ。中堅じゃない」

^イ入社した時の書類を見たって、なんでなんだろうと思うが聞けない。自宅のどこかにコピーが残っているはずの履歴書に、自分はなにを書いただろうか。記憶を引き出そうと、頭の中に潜りたいが、口が勝手に、

「いえ、アルバイトの時は、もちろん真面目に働いていたつもりでしたけど、社員とは全然、経験できる業務が違いますから。まだまだです」

と殊勝なことを答える。^B頭の裏側に書いてある正解を、他人が読み上げているみたいだった。^⑥若手らしいはきはきした発声は、練習してきたような正確さで、わずかな照れを滲にじませてある。「趣味の欄に読書って書いてあったね。そんなの、就活生みんなが書く適当なやつだと思わない。ナガイさんに関してはほんとうのほんとうだったわけだ。大学生の時から小説家になりたかったんでしょ？」

「そうですね。はい。学生の頃から、小説の新人賞に投稿してました」

「じゃあなんでPALに就職したの？」

えっ、と言葉に詰まる。広報部長は気さくな様子で笑ったままだった。

「出版社とか本屋とか、そういう方面に進むんじゃないの、普通は」

「どうでしょう。わたしはでも、PALで働きたくて……」

一人で自立して生きていけるだけのお金がもらえる会社であれば、どこでもよかったというのは、確かにそうかもしれないなかった。やりたい仕事はなかったし、小説を書きたかった。小説の仕事だけで生活費を稼ぐのは難しいと、いろいろな小説家のエッセイやインタビューに書かれていたので、もしデビューできても、別の仕事もずっと続けるのだろうし、そもそも一生デ

ビュできないかもしれないので、仕事は慎重に選ぶべきだったのだけど、ほんとうになんでもよかった。PALのバイトは嫌ではなかったし、ゲームセンターも好きだったから、そのまま就職した。それをどうしてと改めて問われても、どこでもよかったからと、言っではいけないのだろう。

この人たちはわたしになにを言わせたいんだろう。朝陽が、そんなことを考えながら広報部長とマネージャーを見つめていると、

「なるほどねえ」

と言いながら広報部長が居住まいを正し、不快にならない程度の距離感を保ちつつ身を乗り出した。

「それでね、ナガイさん。半年に一回発行してる社内報があるでしょう。株主総会でも配付してる冊子だけど」

真っ白のつるつるした紙に、黒と青の二色刷りにされた、数ページの冊子が頭に浮かんだ。配付されているが新人の頃を除いてろくろく読んだことがない。新店舗の紹介や、売り上げが伸びた店舗の事例紹介など、毎号変わり映えしない内容だった。

「あそこにコラムを書いてほしくて」

「コラム、ですか」

「いやそんなに大げさなものじゃなくていいんだ。あなたの目から見て、ゲームセンターがどんなところか、PALがどんな会社かということ、五ページか六ページか、そのくらい書いてくれたらと思って」

朝陽はぞっとして「それって」と声を出してしまう。もつとよく考えて慎重に発言すべきだ、と怖気づいているのに言葉が止まらない。

「長井朝陽としてですか。それとも早見有日としてですか」

口に出した途端、知りたいのはまさしくそのことだ、と確信が芽生え、口から出してしまった言葉が重たくなる。対峙する広報部長と朝陽との間にあるミーティングテーブルの上に、無防備に投げ出されて横たわった言葉が、身じろぎもせず審判を待っていた。

広報部長がうつふ、と口に出して笑った。

「どっちも一緒でしょう。長井さんは小説家早見有日なわけだから。あのね、小説家の目から見るゲームセンターっていう場所がどういうものかということ、書いてもらうのっていいと思うんだよ。個人の娯楽の場であり、友人や家族と親交を深める場でもあり、楽しむだけじゃなくて、ゲーム技術を高めに来ている、勝負に来ている人もいるわけで……そういう雑多でユニークなところだっていうのをね。どうかな」

朝陽が書くまでもなく、すでに書く内容が決まっているような口ぶりだった。

「それを書いたとして、署名が付くと思うんですけど、そこに載る名前はどちらになりますか。長井朝陽か、早見有日か」

朝陽が静かな声で食い下がると、広報部長は首を左右に折り曲げて、うーんと唸^{うな}り、
「どっちでも、好きな方でいいよ」

と言った。朝陽を安心させるように、にっこり笑っていた。でも、と朝陽がつぶやく。でもわたし書けないです。言ってしまったてすぐ、言ってしまったと焦っている。その気持ちを底上げするように「えええ、どうしてえ」と広報部長が声をあげる。まだ満面の笑みを浮かべている。

「コラムはその、書いたことがないし、うまく書けるかどうか分かりません。それに、長井朝陽として書くとしたらそれは、入社してほんの六年の、平社員の意見になってしまうというか、そう受け取られると思うんです。社内報を読んだ人は、長井朝陽が小説家だなんて知らないのです」

「いやー、けっこうみんな知ってると思うけどねえ。あつ、コラムの中に書けばいいじゃない？ 小説家してますって」

「あの、すみません」

思ったよりはつきりした声が出た。

「わたし、PALに勤めていることは公表するつもりがないんです。本名は出さないで活動したいと思っていますし、早見有日の勤務先もどこにも言うつもりがありません」

「へえ。なんかあれ？ 小説家がゲームセンターなんか勤めてるって知られたくないとか？」

意地悪な物言いよりも、広報部長の立場にある人が「ゲームセンターなんか」という言い方をしたことにショックを受ける。違います、とかううじて答える。声がかすれていた。

「いやいやごめんごめん、いじめるつもりは全くないんだけどね。じゃあ、長井さんの名前を出さないで、早見有日さんとして書いたらどうか。勤務してるとは書かなきゃいいじゃない。ただゲームセンターについてどう思うか、書いたらいいよ」

早見有日の名前で書くのであれば、依頼は出版社を通してほしい。そう言いたかったけれど、お高くとまっていると思われるに違いないので言い出せなかった。どうしてこんな問題が起こっているんだか分からない。朝陽の頭の中に「退職」の二文字が浮かぶ。これまでも何度も浮かんできていたけど、意識して沈めていたことだった。

「でも、すみません……」

声をしぼりだして、頭を下げる。視線の先に、まだ半分ほど残っているコピーがあり、黒い水面に自分の顔の影が映っていた。影の中の自分の目を見つめて、数秒数える。

部屋の外を数人が話しながら通って行った音が聞こえた。ここは静かだ。静かすぎる。朝陽の耳はもう、フロアのジャン・ジャララララを懐かしく求めている。

頭を下げたまましていると、「うーん、まあ、そうか」と広報部長がワントーン沈んだ声で唸った。諦めてくれたかと、安心と落胆させたことへの恐怖がないまぜになった気持ちで顔を上げると、目が合った広報部長がぱっと笑顔になったので腹の底がひりついた。「でもさ、」と明るいう声になって言い放たれる。「とりあえずちよつとの間、検討してみてよ」

はい——、と答えるしかなかったと思うのだけど、ほんとうにそれしかなかったか、と朝陽^エは後になって何度も自問自答することになる。自問自答している間はずっと嫌な気持ちになるので、そのためにだけに繰り返す。

(注) *瓜原さん——出版社の編集者。

問1 二重傍線部A～Eの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤

のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 16 ～ 20。

A 油を売る 16

① だらだらと商売する

② 無駄話などをして仕事を怠ける

③ 仕事をさぼって遊ぶ

④ 暇つぶしに噂うわさ話をする

⑤ 道草して家に帰らない

B 殊勝しゅしょうな 17

① 控えめな

② まじめな

③ 横柄よこがたな

④ けなげな

⑤ 勝気しょうきな

C 居住まいを正し 18

① きちんとした姿勢になり

② 背伸びをし

③ 身を乗り出し

④ 身なりを整え

⑤ 座り方を変え

D 怖気おそけづいている 19

① 泣き出したくなって

② こわくてしりごみをしている

③ 逃げ出したくなっている

④ 冷静れいじやうになっている

⑤ 寒気さみけを感じている

E お高くとまっている 20

① いきがっている

② 威張いばっている

③ もったいぶっている

④ プライドプライドが高い

⑤ 見栄みえを張はっている

問2 傍線部ア「緊張しているのはこちらの方だ、と朝陽は軽い頭痛を覚える」とあるが、このときの朝陽の様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 21。

- ① 広報部長という肩書きを持ちながら、芥川賞受賞作家だからと目の前の小娘に卑屈な態度を向ける相手に、〃何か企^{たく}んでいるに違いない〃と警戒している。
- ② 勝手に決めつけて自意識過剰なことを言っているが、緊張しているのは本部のお偉いさんを前にしている〃一社員に過ぎない自分だ〃と心の中でぼやいている。
- ③ 広報課への出向を命じられたのに、コーヒーを出されて広報部長に接待されているような形になり、〃これからどんな話に付き合わされるのだろう〃と用心している。
- ④ 小説家がふだんからいつも小説のネタを探して人を観察しているかのように決めつけられ、〃そつちこそ人を値踏みしている最中ではないのか〃と頭に来ている。
- ⑤ こうして自分呼び出した理由も明かさないまま、小説家に会えたことにはしゃいでいる相手が不快で、〃いったい何の用事だろう〃と思いながら頭痛に耐えている。

問3 傍線部イ「入社した時の書類を見たって、なんでなんだろう」とあるが、このときの朝陽の様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22。

- ① 直接の上司でもない広報部長が、今さら自分の入社時の書類を見た理由が分からず、なにを言いたいかをなかなか明かさない態度に不快になっている。
- ② 仕事でも小説のことを考えているのかと問われたことで勤務態度への懸念かと思い、履歴書まで見た広報部長の意図を想像しておびえている。
- ③ 八年も前の履歴書になにを書いたかなど覚えていないが、見られたら恥ずかしいことを書いたかもしれないという考えが頭をよぎり動揺している。
- ④ 面談の意図が不明なうえに広報部長がいつまでも本題に入らないので、本題と自分の入社時の書類がどう関係しているのだろうか疑問に思っている。
- ⑤ 自分の職歴に言及されたことで、小説家が本業でここへはアルバイト感覚で来ているのかと皮肉られていると感じ、落ち着かない気分になっている。

問4 傍線部ウ「朝陽が書くまでもなく、すでに書く内容が決まっているような口ぶりだった。」とあるが、このときの朝陽の様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 23。

- ① 文章を書くのが長井朝陽か早見有日かというのが重要なのに、どちらでも一緒と簡単に片付けられ、自分が軽く見られていることに不快になっている。
- ② 実名かペンネームかを気にかけないうえに、書く内容を先にイメージしているのは執筆依頼者としてとても失礼なことだが、部長は全く無自覚なのであきれている。
- ③ コラムの内容は実はどうしてもよく、芥川賞作家の早見有日がコラムを書いているという事実だけが欲しいのだろうと、広報部長の魂胆を見透かしている。
- ④ 書きたくもないものを書かせられるこっちの気も知らないで、株主に見せるためだけに自分を利用しようとする広報部長の腹黒さにうんざりしている。
- ⑤ 小説家・早見有日に依頼するのであれば、先に出版社を通して執筆を打診してくるのが筋なのに、この場で済まそうとしていることに腹が立っている。

問5 傍線部エ「朝陽は後になって何度も自問自答することになる」とあるが、なぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 24。

- ① 後からは余計に断りづらくなり、なんとしてもあのかき断るべきだったと後悔し、自分を責めるようになったから。
- ② どう答えたなら今の悩ましい状況にならなかったのかと、悩ましさを抜け出そうと考え続けてしまうから。
- ③ 思わず「はい」と答えてしまった己の弱さをうらみ、今からでも断りたいとあれこれ思い悩むことになったから。
- ④ 快諾したつもりはないのに、それが既成事実のようになってしまい、周囲に訂正して回るのが大変だったから。
- ⑤ 広報部長が諦めてくれたと早合点して顔を上げてしまったために、引き受けることになったことを悔やんだから。

問6

Aさんは、朝陽の言動に関する描写や心の声に注目し、次のように整理した。空欄

に当てはまる表現として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選びな

さい。解答番号は ㉔。

●朝陽の言動に関する描写

- ・ 照れているように見えますように、と念しながら俯き加減で控えめに笑って
- ・ 口が勝手に、……殊勝なことを答える
- ・ 若手らしいはきはきした発声は、練習してきたような正確さで、わずかな照れを滲ませてある

↓若手社員として望ましい姿を見せることを意識して演じている

●朝陽の心の声

- ・ でもそれを言わない方がいいんだろう
- ・ どこでもよかったからと、言っではいけないのだろう
- ・ この人たちはわたしになにを言わせたいんだろう

↓なにを言うべきで、なにを言わないでおくべきか、非常に意識して発言している

(広報部長からコラムの執筆を依頼される)

- ・ もっとよく考えて慎重に発言すべきだ、と怖気づいているのに言葉が止まらない
- ・ 言ってしまったてすぐ、言ってしまったと焦っている
- ・ お高くとまっていると思われるに違いないので言い出せなかった

↓長井朝陽と早見有日との切り分けにこだわり、意図しない発言をし始めている

《考察》

広報部長との面談で、朝陽は当初、若手社員として振る舞い、自分の発言に相当気を遣っている。しかし部長がコラムの執筆を依頼してきたあたりから、様子が変わる。朝陽はPALに勤める自分と、作家としての自分とを切り分けたいが、部長にとってはどっちでも同じ。売り出し中の小説家・早見有日が社内報に文章を書くことが重要なのだ。

広報部長は職場の上司として登場しているが、人物ではないかと思う。

- ① 一躍脚光を浴びた部下の関係者であることに浮かれる軽薄な
- ② 部下の小説家としての活躍を心から祝福する面倒見のいい
- ③ 社員だからと安易に社内報の執筆を高圧的に押しつける非常識な
- ④ 自社の社員が副業をしていることを快く思っていない意地悪な
- ⑤ 有名になると寄ってきて利用しようとする世間にありがちな反応を象徴する

問7

次の(1)～(5)について、波線部①～⑤の内容や表現に関する説明として、適当なものに

は①を、適当でないものには②を、それぞれ選びなさい。解答番号は ②⑥ ③⑩。

(1) 波線部①「つられたように同じ系統の笑みを浮かべた」は、依頼を受けてもらうために朝陽の機嫌を取っておきたい広報部長が、朝陽と同じように作り笑顔を浮かべていたことを、抽象的な表現で述べている。 ②⑥

(2) 波線部②「頭の裏側に書いてある正解を、他人が読み上げているみたいだった。」は、うかつに本音を気取られたくない朝陽が、模範解答的な建前上の対応をしている様子を、俯瞰的な視点で描写している。 ②⑦

(3) 波線部③「無防備に投げ出されて横たわった言葉が、身じろぎもせず審判を待っていた。」は、思わず口にしてしまった質問が、どう受け止められたか、どんな答えが返ってくるかと恐れている朝陽の緊張を描写している。 ②⑧

(4) 波線部④「『えええ、どうしてえ』と広報部長が声をあげる。まだ満面の笑みを浮かべている。」は、朝陽の態度が気に入らない広報部長が、無邪気な様子を装い陰湿に圧力をかけているさまを表している。 ②⑨

(5) 波線部⑤「影の中の自分の目を見つめて、数秒数える。」は、広報部長がコラムの執筆依頼を諦めてくれることを願いつつ、自分の意向が認められるまで頭を下げたままであるつもりの朝陽の切実さを表している。 ③⑩